



今月13日に、6年生は「住所のない手紙」の学習をしました。

住む所による差別に苦しむAさんに対し、本当の仲間として、どんな言葉をかけられるか、6年生の子どもたちは真剣に考えました。

「ずっと相談して。一緒にたたかうから」

「休み時間になったら、一緒におろう。」

「Aさんの気持ちが全部分かるわけじゃないけど、私なりに考えるよ。」

Aさん役を演じた教員は、子どもたちの言葉を受けて、涙が出そうになったと言っていました。

「みんなが幸せになる学習」は続く

この「住所のない手紙」は、教材としては小学校の人権学習の締めくくりとして位置付けています。しかし、6年の人権学習は、まだこれでは終わりませんでした。

17日のなかよしタイムでは、6年生は「残りの期間で、普段から協力場面を増やし、関わっていきたいと思います」「残りの期間で、一人一人が周りを見て、一緒に遊びに誘っていきます」と、残りひと月の行動目標を宣言しました。



【「住所のない手紙」の一場面】

翌日の劇団四季ファミリーミュージカル「王子と少年」では、育った環境が全くちがう二人が入り替わることで起こる騒動を通して、「大切なのは、姿かたちではなく、本当の自分らしさを見つめること」というメッセージを受け取りました。

ある児童は観劇後、「あれは演技じゃない。本人やろ。」と言葉をもらしました。キャストが本人になり切っているのと同じように、観ている私たちも、時には王子エドワードになり、時には貧しい少年トムになり、二人を応援しながら、その世界の一員になっていたのです。

思い返せば、私たちは幼いころから、「花さかじいさん」を読んで正直な生き方の大切さを知り、「北風と太陽」で優しさに憧れ、「スイミー」で小さな力を合わせる勇気のすばらしさを学んできました。純粋な子どもは、こうした感動をそのまま自分の生き方に取り入れ、私たち大人は、いつしか忘れかけていた大切な心を取り戻します。このファミリーミュージカルもまた、人を育てる大切な人権学習の一つだったと言えるでしょう。

さて、劇団四季と言えば「キャッツ」が思い浮かびます。その中の名バラード「メモリー」から。

Memory (思い出……)

Turn your face to the moonlight (お月さまの光へ顔を向けて)

Let your memory lead you (思い出に導かれるまま)

Open up, enter in (開かれた扉を入っていきましょう)

If you find there the meaning of what happiness is (そこに幸せって何なのかを見つけられたなら)

Then the new life will begin (新しい人生がきっと始まる)

人権学習は、「みんなが幸せになるための学習」です。「開かれた扉をくぐり、幸せを見つけられたら、新しい人生がきっと始まる」——この歌詞は、まるで卒業を迎える6年生に贈る言葉のように感じられます。